
バカとテストと転校生！

ゆき

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

バカとテストと転校生！

【Nコード】

N3516Y

【作者名】

ゆき

【あらすじ】

風間 勇斗は『試験召喚システム』を取り入れた進学校、『文月学園』に興味を持ち 家族のこともしやになつたので周囲の意見を無視して転校を果たす、疲れがたまつたのか居眠りでFクラス入りを果たす。そこでかつての友達、観察処分者の吉井明久と学年2位の才女、姫路瑞希と再会し元神童、坂本雄二や帰国子女、島田美波 それに木下秀吉やFクラスのバカと関係を持つことになる

主人公紹介

オリキャラ紹介

風間 勇斗 17歳

身長 170cm 体重 60kg

特技 剣術 脱走術 料理 弓道

趣味 昼寝 悪巧み 料理 読書 裁縫おもにぬいぐるみとか

得意教科 物理 数学 英語 世界史 現国

苦手教科 日本史 保健体育

容姿 白髪短髪。体系は普通

おとなしそうな顔つきで、勉強や読書に勤しむときは眼鏡を掛ける。

異性にまったく興味がなく、そのため男のロマン（エロ本）にも興味はない。

好きな女性のタイプは特になし

本作の主人公で、明久、姫路とは小学校の頃の友達だが髪の色とか変わっているので現在2人はきずいていない

小学4年生のときに親の都合で転校する

寒いところに転校することが多かったのでそのためか寒さにはめっぽう強いが暑さに弱い。

中学3年の頃から貯めた貯金と小説を書いて投稿してそれがヒットして売り上げにより文月学園へ転校する。

機械音痴で、料理用の電子機器と携帯いがいので使える電子機器はすくない

本来なら学年主席に居てもおかしくないほどの頭脳の持ち主だが、
気まぐれな性格と引つ越しの疲れがたまり居眠りをしてFクラスに
配属された

ちなみに前にいた学校では50点満点の平均は48点。

最初のころはクールなふりをしているが 本当は優しく気さくな
振る舞いをする、誰にでもそうというわけではなく、信頼を置いて
いる人物にはまた別の対応をする。

爺さん 父親、母親、の4人家族だが 一人で転校してきたため、
一人暮らし。

大きな屋敷で1人暮らし だが明久のマンションのとなりの部屋も
借りている

学力、策力、身体能力全てにおいて秀でているが、明久レベルの鈍
感がたまにあるかも

一人称はオレ。

自分が気に入らない物は容赦なく潰す。

基本的に自分から人を嫌悪することは少ない（格別迷惑な連中は別）
。

常に木製のくないと短剣それと木刀を携帯している

いじめ対策で武器を持ち歩いてみたところ不良を圧倒。

刀剣類を持てば右にでる奴はいないと称された。

危険人物扱いもされた。

一度見たものを決して忘れない完全記憶能力を持っているが秘密に
している、高校から大学までの内容は全教科1年の3学期に終了さ
せている

裏設定

怪盗の家系で呪いがある美術品を盗んだりする
人格がもう一つあり髪が紫色になる翼も生える
この街に来た理由はいろいろある

召喚獣

赤のジャケットとか黒のジーンズを着ている 黒い外套をたまに着
ていることもある

両手に短剣か大剣を持っている 弓もたまに持っている

腕輪の能力は剣や弓に雷、炎、氷結などの属性をつける（攻撃力が
1・5倍から3倍まで上げることができる）

もう一人の精神の方で召喚すると

怪盗の姿で翼が生えている

翼が武器

プロローグ（前書き）

読んでいただければ幸いです

プロローグ

「吉井、遅刻だぞ」

吉井明久。文月学園二年所属、この学園ではじめての「観察処分者」である（要するはバカである）吉井明久はドスの聞いた声に呼び止められる。

声のした方には浅黒い肌に短髪のいかにもスポーツマンですみtainな人が立っていた。

文月学園補習担当の西村宗一こと鉄人（鉄人こと西村先生）である。

「あ、鉄じ————じゃなくて西村先生。おはようございます」

明久は軽く頭を下げて挨拶する。相手は生活指導の鬼だ。目をつけられたらろくなことになるのだ

「今、鉄人って言わなかったか？」

「ははっ。気のせいですよ」

「ん、そうか？」

やばかったな。危うく普通に「鉄人」と呼んでしまうところだった。鉄人っていうのは渾名だ。彼の趣味であるトライアスロンが原因である。真冬に半そでとかほかにも色々ありそうなんだけど

「それにしても普通に『おはようございます』じゃないだろうか」

「先生。先生は僕が挨拶せずに無視していたらどうするつもりでした？」

「補習室行きは確定だったな」

「だったら挨拶を重んじましょうよ」

「それとこれとは話が別だ」

「全くお前というやつは……遅刻の謝罪より先に挨拶の大切さを説くとは……いくら罰を与えても懲りないな」

「先生。僕、遅刻はあんまりしてないですよ？遅刻の常習犯みたいに言わないでください」

西村先生は去年明久のクラスの担任だったので明久が遅刻の常習犯でないことは知っている。

「遅刻は、な。ほら、受け取れ」

鉄人が箱から封筒を取り出し明久に渡した。宛名の欄には『吉井明久』と書いてあった。明久は一応頭を下げて受け取る。

「あ、どーもです」

「全く。転校生もしっかり来てるんだから、しっかりしろ」

「転校生？」

明久が首をかしげる。

「それにしてもどうしてこんな面倒なやり方でクラス編成を発表してるんですか？掲示板とかで大きく張り出しちゃえばいいのに」

こうやって皆に一枚一枚丁寧に封筒に入れて渡さなくてもいいのに。

「普通はそうするんだけどな。まあ、ウチは世界的にも注目される最先端システムを導入した試験校だからな。この変わったやり方もその一環ってわけだ」

「ふーん。そういうモンですかね」

適当に相槌しながら明久は封筒に手をかける。

さてコイツはどのクラスに入るのか

この文月学園はクラスがA〜Fまでである。二年生以上はAから順に振り分け試験の成績順でクラスが決まっていくな。

頭いいやつはAだし、頭悪いやつはFだ。つまりは所属してるクラスで頭の良し悪しが丸分かり。だからコイツはFだけは避けたいんだ。

「吉井、今だから言うがな」

「はい、なんですか？」

あの封筒って糊付け頑丈なんだよな……
苦戦してるぜ。明久のやつ……

「俺はお前を去年一年見て『もしかすると、吉井はバカなんじゃないか？』なんて疑いを抱いてたんだ。」

「それは大いなる間違いですね。そんな誤解をしているようじゃ、更に『節穴』なんて渾名をつけられちゃいますよ？」

明久は勉強しなかったけど振り分け試験は良く出来たと言ってた気がする

「ああ。振り分け試験の結果を見て、先生は自分の間違いに気づいたよ」

「そう言ってもらえると嬉しいですよ」

開かない……破ってあげよう……

明久はDかCだろうかと思ったと言ってた

「喜べ吉井。お前への疑いはなくなった」

明久。冥福を祈らせてもらおうか・・・・・・・・

『吉井明久・・・・・・・・Fクラス』

「お前は疑いようのない正真正銘のバカだ」

こうして俺たちの最低クラス生活が幕を開けた。

「・・・・・・・・なんだろう、このバカでかい教室は」

ノートパソコンに個人エアコン、冷蔵庫にリクライニングシート

「まるで高級ホテルじゃないか・・・・・・・・まさかこれが噂のAクラスか・・・？」

明久くん。君はFクラスだ。

「え？何この声？何これーーーーーー！！？」

明久がFクラスに向かおうとするとき（？）にAクラスのクラス代表っぽい人が見えた。

「・・・・・・・・霧島翔子です。よろしくお願いします」

黒髪を伸ばした日本人形のような、何か神々しささえ感じさせるような人だった。

二年Fクラスの前。吉井明久は躊躇していた。

「遅刻なんてして、みんなの印象悪くなってないかな．．．？痛い奴とか居たらどうしよう．．．」

「なんて考えすぎだね！」

そういつてあいつは扉を開けて入って

「すいません。ちょっと遅れちゃいました。」

愛嬌たつぷりに言って．．．．．

「早く座れこのウジ虫野郎」

台無しにされた。

「聞こえないのか？ああ？」

それにしてもなんて物言いだろう。いくら教師でも失礼にもほどがある。

僕はにらみつけるように教壇に立っている教師を見た

その背は意外に高く、だいたい180cm強くらい。やや細身ではあるが華奢なわけではない。むしろボクサーのような機能美を備えた細さを感じるぞこの教師

視線をもうちょっと上にやると現れたのは意志の強そうな野性味たっぷりの顔をした教師（教師以下略）。

短い髪がつつんと立っていてまるでたてがみのように見える（もうどうでもいい）。

「……雄二、何やってんの？」

彼は明久の悪友、坂本雄二だ。教師じゃない。生徒だ。

「先生が遅れてるらしいから代わりに教壇に上がってみた。なんか転校生がこのクラスに来るらしいぞ。」

「あ、そういえば鉄人も転校生がどうか言ってた・・・」

『なにー！ー！？転校生だとおおおお！！！？』

『男か！？女か！？』

「残念ながら男だ」

坂本の死の宣告。

この一言でFクラスはずーんと沈んだようで。

「で、何で雄二が先生の代わりを？」

「一応このクラスの最高成績者だからな」

「え？それじゃ、雄二がこのクラスの代表なの？」

「ああ、そうだ」

明久はこのとき『雄二さえ説得すればこのクラスは僕の思いどおりに……』とか考えてたらしい。

「これでこのクラスの全員が俺の兵隊だな」

考えることは皆同じなんだな

でもってFクラスの面々はみんな床に座っている。決まってるさ椅子がない

「それにしてもさすがはFクラス。ひどい設備だね」

とりあえずあいている席でも探そうとおもった時、

不意に背後から覇気のない声が聞こえてきた。

「えーと、ちょっと通してもらえますかね？」

そこには寝癖のついた髪によれよれのシャツを貧相に着た、いかにもさえない風体のオジサンが居た。

このクラスの担任だ。

「それと席についてもらえますか？HRホームルームを始めますので」

明久と雄二がそれぞれ返事をして席に着く。

先生は明久たちを待ってから壇上でゆっくりと口を開いた。

「えー、おはようございます。二年F組担任の福原慎ふくはらしんです。よろしくお願いします。」

福原先生は黒板に名前を書こうとして、やめた。
チョークすらまともにないみたいだな

「皆さん全員に卓袱台と座布団は支給されてますか？不備があれば申し出てください」

「せんせー、座布団に綿が入ってないです」

「我慢してください」

「せんせー、卓袱台の足が折れました」

「ボンドで直してください」

「せんせー、窓が割れてて隙間風が寒いです」

「ビニール袋とセロハンをあげますから直してください」

・・・・・・・・ひどすぎる。

「では、自己紹介でも始めましょうか。そうですね、転校生からやつてもらいましょう」

『男だろ？どーでもいい・・・・・・・・』

『早く帰りたい』

めんどくさいなこんなクラスでやっていけるか

「では、風間勇斗くん、入ってきてください」

先生に呼ばれて、オレはFクラスの教室に入った

第壱話 バカとFクラスと自己紹介

「では、風間勇斗くん、入ってきてください」

先生に呼ばれて、オレはFクラスの教室に入ってしまった。

「風間勇斗くん。軽く自己紹介をしてください」

先生にそう促され、4人以外は聞いちゃいないだろうなと思ったけど一応自己紹介をした。

「えっと、風間勇斗といいます

趣味は料理と読書、剣術とかが得意かな。1年間よろしく願います」

さつと趣味と特技を言ったところでFクラスの面々が色々呟いている。

『けっこう可愛い顔してるな・・・』

可愛いかオレ母親にだと言われたことはあったがそういわれると不快だ

「うぜえこというと消すぞ」

そういつて殺気を出す

静かになった

その後

「しつもーん」

一人が手を上げてきた。

「頭はどのくらい悪いですかー？」

言いにくい質問だけどまあいいか

「振り分け試験の時は1つの教科以外寝ていたからほとんど0点に近い」

この文月学園のテストは変わっている。

問題数無制限で、時間内なら一度に何点でも取れる。
極端に言えば時間さえあれば1万点でも取れる

「けど前に居た学校では上の中ぐらいだ」

今度は皆が吐血した。

「えっとそういうことなんでよろしく」

ほんとに最低クラスなんだと思った

「では、自己紹介でも始めましょうか。廊下側の人からお願いします」

先生に言われ廊下側の生徒が一人立ちあがり名前を告げる

「木下秀吉じゃ。演劇部に所属しておる」

しゃべり方がなんか違和感あるけど演劇部のなんかだろ。

男物の制服を着ているなんでだろう

次の人が自己紹介を始める。

「……………土屋康太」

「特技は盗sじゃなくて盗tなんでもありません」

なんかあやしいやつだな

「島田美波です。海外育ちで日本語は会話は出来るけど読み書きが苦手です」

と思って聞いてると女子の声だ。こんなむさい奴ばつかじゃなくて良かった。

「あ、でも英語も苦手です。育ちはドイツだったので。趣味は……」

ドイツからの帰国子女？

「趣味は吉井明久を殴ることです」

なんちゅー危ない奴だ！

吉井明久と思われるさっきの遅刻してた奴が喚いている。

きつと去年もあんな感じだったんだろうな。

吉井明久 たしか引つ越すする前に仲良くなったバカの吉井ってけどいいかきずかれなくて

あとはもう名前を言うただけか。
つまらないな。

明久まで順番が回ったようだな。

あいつの自己紹介が終わったら確認しねえと。

「——コホン。えーっと、吉井明久です。気軽に『ダーリン』って呼んでくださいね♪」

「ダー——リン——イ——イ——ン——！！！！」

うわきもいキモ過ぎるよこのクラスあり得ないよ

「——失礼。忘れて下さい。とにかくよろしくお願い致します」

そのあとに教室に入ってきた

「あの、遅れて、すいま、せん……………」
『え？』

クラスのほぼ全員が驚きの声を上げる。

そんな中、平然としてる数少ない人物、福原先生がその女子に話しかけた。

「丁度良かったです。今自己紹介をしてるところなので姫路さんもお願ひします」

「は、はい！あの、姫路瑞希といいます。よろしくお願ひします……………」

「小柄な身体を更にちぢ込めるようにして声を上げる姫路さん。肌は新雪のように白く背中まで届く柔らかそうな髪は、優しい彼女の性格を表しているようだ。保護欲をかきたてる可憐な容姿は、男

だらけのFクラスで異彩を放っている」

「落ちて吉井。心の中のナレーションが表に出てしまっているぞ。それから無表情でそういう個人的な解析をすると変態に見えるからやめろ。土屋。貴様はなぜカメラを用意している」

「・・・・・・・・・・・・・・・・写真を撮って売る」

「へえそうなんだ」

あとで消そう

それにしても姫路って頭良くなかった

「はいっ！質問です！」

既に自己紹介も終わってるどうでもいい男子A君が手を上げている。

「あ、は、はい。なんですか？」

「登校するなり、質問がいきなり自分に向けられて驚く姫路さん。その小動物的な仕草が可愛かったり」

「だから個人的な解析を口に出してするな。このバカ変態」

「なんだと！？僕のどこが変態なんだ！」

「全てだ」

「グハア！」

明久が吐血してくたばる。まあ静かになっていいや。

既に自己紹介も終わってるどうでもいい男子A君が質問を以下略。

「なんでここにいますか？」

・・・・・・・・失礼な奴だな。

『確かにそうだ。姫路さんは学年次席に匹敵するんじゃないのか？』

『どういうことだ？』

『姫路さん結婚して』

だが姫路がなぜFクラスにいるのかはオレも気になった。
まさかオレじゃあるまいし居眠りなんて……………

「そ、その……………」

「振り分け試験の最中、高熱を出してしまいまして……………」

ああ、納得。

確か振り分け試験は途中退席したら無得点扱いだったか。
0点じゃFクラス入りはむしろ必然とも言うべきか。
またFクラスのバカどもが騒ぎ出す。

『そういえばオレも熱（の問題）が出たせいでFクラスに』

『ああ、化学だろ？あれは難しかったな』

『俺は弟が事故に会ったと聞いて実力を出し切れなくて』

『黙れ一人っ子』

『前の晩、彼女が寝かせてくれなくて』

『今年一番の嘘をありがとう』

「で、ではっ、一年間よろしくお願いします！」

姫路は明久と短髪の不良っぽい奴の隣の空いている席に着く。

「き、緊張しましたあ……………」

席に着くや否や、姫路は安堵の息をついて卓袱台に突っ伏す。

「あのさ、姫「姫路」」

「は、はいっ。なんですか？えーっと・・・・・・・・・・」

「坂本だ。坂本雄二。よろしくな」

「あ、姫路です。よろしく願いします」

「ところで、姫路。体調はいまだに悪いのか？」

「あ、それは僕も気になる」

振り分け試験の時のことは詳しくは知らないが、さつき本人が高熱出したって言ってたし気になるものは気になる。

「よ、吉井くん！？」

さつきから明久がなんかショック受けてる。

「姫路。明久がブサイクですまん」

坂本雄二が言う

「そ、そんな！目もパッチリしてるし、顔のラインも細くて綺麗だし、全然ブサイクなんかじゃないですよ！その、むしろ・・・・・・・・・・」

「

そしてその一言でショックを受けてた明久が手放して喜ぶ。
なんて単純でバカなんだ・・・・・・・・・・

「そっいえば確か明久に興味を持ってる奴がいたような・・・・・・・・・・」

「

そんなのいるんだ。

「え？それって誰——」「そ、それって誰ですか!？」
「確か久保・・・・・・・・・・」

久保のその次は？

「・・・・・・・・利光だったか」

久保利光〓男

吉井明久〓男

結果〓BL

「・・・・・・・・（明久が声を殺して泣く）」
明久って男にもてるんだ

「おい明久。声を殺してさめざめと泣くな」

「心配するな、半分は冗談だ」

「え？残りの半分は？」

「ところで姫路、体調はもう大丈夫なのか？」

「あ、はい。もう大丈夫です」

「その君たち。少し静かにしてください」

と先生に注意されたところで、

バキバキガラガラ・・・・・・・・

先生の教卓は無残にもゴミになってしまった。

さすがFクラス。酷すぎる。

「えー、替えを用意してくるのでここで自習でもしてて下さい」といって先生も出て行ってしまう。

ホントになにから何まで最低クラスなんだ……………

「雄二、ちよつといい？」

「ん？なんだ」

「ここじゃ話しにくいから廊下で」

「……………分かった」

そういうと二人は立ち上がって廊下に出て行った。

となりの席の秀吉に挨拶をする

「木下だったな」

「そうじゃが」

「よろしくな一つだけ質問があるけどいいか」

「なんじゃ」

「何でお前男子用の制服着ているんだ」

「お前もわしを女子としてみるのか」

えっなんでそんな反応なのだろう

「わしは男じゃ……………」

「それはすまん」

「まあわかってくれたらいいのじゃ」

第貳話

バカテスト 化学

第1問

『調理の為に火にかける鍋を製作する際、重量が軽いのでマグネシウムを材料に選んだのだが、調理を始めると問題が発生した。この時の問題点とマグネシウムの代わりに用いるべき金属合金の例をひとつ挙げなさい。』

姫路瑞希と風間勇斗の答え

『問題点……マグネシウムは炎にかけると激しく酸素と反応する為危険であるという点

合金の例……ジエラルミン』

教師のコメント

正解です。合金なので『鉄』では駄目という引っかけ問題なのですが、姫路さんと風間君は引っかけありませんでしたね

土屋康太の答え

『問題点……ガス代を払っていなかったこと』

教師のコメント

そこは問題じゃありません。

吉井明久の答え

『合金の例・・・・・・・・未来合金（↑すごく強い）』

教師のコメント

すごく強いといわれても。

明久 side

「それで、話つてなんだ？」

「この教室なんだけど・・・・・・・・」

「ああ、ひでえもんだな」

「何とかできないかな」

さすがにHR中だから人影はないし、これなら安心して雄二と話が出来る。

「教室の設備をなんとか・・・・・・・・ねえ・・・・・・・・」

「うん。こんな風に汚れてたんじゃ、勉強だつてままならないし、何よりみんなの身体に害が出る・・・・・・・・だから、もっといい設備を手に入れて、皆が安心して学園生活を遅れるように・・・・・・・・」

「つまりお前は体調の悪い姫路のために教室の設備をもっと良くしたいわけだ」

うぐうつ！さすがかつて“神童”と呼ばれただけのことはあるな！
勘だけはいいい奴だ！

「恥ずかしいから遠まわしに言ってるのにストレートに言い直さないでよー！」

なんだかものすごい恥ずかしい。Fクラスの人たちに聞かれたら殺されそうだな（特に須川とか）。

Fクラスには女子といい感じになった男子（審問するやつら曰く異端者）を審問する（ただの逆恨み&妬み&八つ当たりなのだが）集団がある。

『異端審問会・FFF団』

Fクラスの須川亮をはじめ、Fクラスの男子（雄二&秀吉&風間以外）全員が所属している。明久でもある。

もてない男の集まった逆恨み集団以外の何者でもない。
ちなみに同じ異端審問会に所属している男子でも審問されることがある。

たいていは理不尽な理由で殺さる………もとい、審問及び処刑される。

「いいだろう。どうせ俺も、やる気でいたんだからな」

「え………？」

「明久がやる気ならなおいい。俺も最初からやろうと思ってたんだからな」

「………雄二。なにを企んでるの？」

僕は雄二に疑いの目を向ける。

コイツは僕の幸せと幸福と笑顔を何よりも嫌っている。

コイツが何か企んでいるということは僕の死亡フラグが確立への一歩を踏み出すということだ。

「ちがうわ。バカ。俺はただ、世の中テストの点数や学力だけが全てじゃねえってことを証明してみたくなっただけなんだ」

「・・・・・・ごめん雄二。疑って悪かったよ」

「気にするな明久」

「うん！やろう！」

『試験召喚戦争』を！！

この文月学園は『試験召喚システム』を取り入れている。

生徒は最後に受けたテストの点数にあわせた攻撃力を持つ召喚獣を教師承認の元、召喚して戦わせることが出来る。

このシステムを利用したのが試験召喚戦争である。

二つのクラスが召喚獣を用いて戦争をし、先にクラス代表を討ち取られたクラスが負けとなる。

勝ったクラスは相手のクラスの設備と自分のクラスの設備を交換出来る。

下位勢力が負けると設備がランクダウンする。

「そこで俺はクラス代表として提案する」

皆がごくりと息を飲み・・・・・・・・

「俺たちはAクラスに『試験召喚戦争』を仕掛けようと思う」

『勝てる訳ないって』

『これ以上設備が酷くなるのは嫌だああ!!』

『姫路さんという天使^{エンジェル}がいたら何も入らない』

みんなが喚きだす。

普通、最下位クラスのFクラスが最上位クラスであるAクラスに勝てる訳がないからだ。

「まあ皆落ち着け。勝算はある」

「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「」

「例えば土屋康太!」

みんなの視線が彼に集まる。

「おい。ムツリーニ。いつまでも姫路のスカート覗いてないで早く前に来い」

「こいつがああ^{ムツリーニ}の寡黙なる性識者だ」

「「「「「!!」」」」

「・・・・・・・・・・・・・・・・!!」(ぶんぶん)」

もう否定しても遅いよ。ムツリーニ。

顔に畳の後が

『こいつがあゝのムツツリー二だと!?!』

『本当か!?!はじめて見た!』

『あいつ、畳に顔をつけてたあとを消そうとしてるぞ!?!確かにムツツリー二だの名に恥じないムツツリスケベだ!』

ムツツリーニムツツリスケベなただけなんだけど、これは結構有名な話。

勇斗side

ムツツリー二ってなんだニクネームか
ムツツリー二だからムツツリスケベとかまさかな

「コイツの保健体育の実力はAクラス以上のものだ。恐らく誰もかなわない。それから木下秀吉!」
へえそうなんだ木下の特技は何かな

「演劇で秀吉を上回るものはいない」
演劇かよまあ特技と言っではいいことだろう

坂本の説明に皆も納得している。

『木下秀吉って、確か演劇部のホープだろう』

『確かAクラスに双子の姉がいるって……』
『なら何かしらやってくれそうだ!』

「さらにこのクラスには姫路もいる。主戦力にして切り札だ」

みんなの視線が姫路さんに集まった

スにも負けないからな」

「『『『『『なるほど』『』『』『』」

うるさいな

「という訳でバカ（あきひさ）にDクラスに宣戦布告に行ってもら
う」

「えーやだよ」

下位勢力の宣戦布告の使者はたいていボコされる。

「行かなきゃ俺がお前をボコす」

「行つてきます!!」

僕はダツシユでDクラスまで宣戦布告に行き、ボコボコにされて帰
つてきた。

その間に坂本はなにやらカッコいい台詞を吐きまくってたのである。

「全^{ベン}員筆を執れ!!出陣の準備だ!!」

『おおー!ー!ー!ー!ー!ー!』

「俺たちに必要なのは卓袱台ではない!システムデスクだ!!」

『おおー!ー!ー!ー!ー!ー!』

HRが終わり

「木下も大変だな」

「秀吉で呼んでくれわしも勇斗と呼ぶから」

「ああ、分かった」

「それにしてもこのクラステンションが高い奴多い気がする」

「そうじゃな」

「秀吉って今日部活あるのか　なかったら一緒に帰ろうと思う」

「きょうはないのじゃ」

そうか

「じゃあ行こうか」

そういつて一緒に帰る

第参話

帰り道

歩いているなんとなく口に出してみた

「秀吉」

「なんじゃ勇斗」

「なんとなくだ」

「そうか」

なんか話す話題がないので本を出してみる

「勇斗何を出したんじゃ」

「ただの本だけだ」

「どんな名前なんじゃ」

「えっと〇〇???って名前の本だ」

「話題の大ヒット作の小説じゃな」

「その6巻だ」

「6巻じゃとたしか1部だけしか発行されていた幻の」

「そうだけだ」

「どうやって手に入れたのじゃ」

「内緒だ」

自分が作者だからって言えない

「秀吉この本欲しいのか」

「別にわしが欲しいわけではないが姉上が読みたいと言っておったのじゃ」

「だったら明日渡しに行くから伝えておいてくれ」

「わかったのじゃ」

そうして途中で別れる

Dクラス戦当日の朝。

本を渡しにいかんといけないな

オレ「昨日のこと秀吉の姉に話したか」

秀吉「うむ喜んでおったぞ」

オレ「そうか回復試験受けたら行くか」

Dクラス戦が始まる

明久side

「吉井！木下たちが渡り廊下でDクラスと交戦状態に入ったわ！」

Dクラスは新校舎の端、Fクラスは旧校舎。

この二つの教室間はかなり距離があるから、戦力も分散しやすい。それをねらっての時間稼ぎだった。

「何が足りないんだろうな……………」

こうしてみると、同じ部隊に配属された島田さんは、いわゆるモデル体型で、背も高いし、脚も綺麗なんだけど、どうしても何か物足りなさを感じてしまう。

「ああ、胸か……………」

と自問自答がポロつと口から出てしまう。

「アンタの指折るわ。小指から順番に全部綺麗にへし折るわ」

まずい。目が本気になってる。

「まあまあ島田さん。今は試召戦争に集中しようよ」

「……………まあ、そうね」

危なかった！！危うく僕の十本の指が揃いも揃って変な方向を向くところだった……………！！

「今戦況はどうなってるのかな……………」

「木下たち先攻部隊が頑張ってくれてるのよ」

そこへ、叫び声が聞こえてきた。

『戦死者は補習室へ集合――！！！！！！』

『て、鉄人！？鬼の補習は嫌だ！！』

『鉄人ではない！西村先生だ！』

『あんなのは補習じゃない！拷問だ！』

『助けてくれー！』

『これは立派な教育だ。補習が終わる頃には趣味は勉強、尊敬する人は二宮金次郎という、模範的な生徒にしてやるから安心しろ！』

『『安心できねー！！！！！！』』

Dクラスの人が3人、Fクラスからも4人、補習室送りが出た。

だがおかげで雰囲気はなんとなく分かった。

この状況で僕らがするべきは、ただ一つ！

「島田さん。中堅部隊全員に通達」

「ん？何？作戦？なんて伝えるの？」

「総員退避！！」

「バカ！！！！」

島田さんに目を（チヨキで）殴られた。

普通そこはグーとかパーとかじゃないの！！？

「目があ！目がアア！！」

「目を覚ますのよ！この意気地なしの甲斐性なし！」

目がアアアアアア！！！！

「アンタは部隊長でしょ！！臆病風に吹かれちゃだめでしょ！！」

「君の言う覚ます目が焼けるように痛いんだけどオオオオオオオオオオオオオオ!!」

島田さんが僕の襟首をつかみあげる。

「ウチ等は木下たちが点数を補給してる間、木下たちの代わりに戦わなきゃなんないの！！ウチ等が逃げたら木下たちが点数の補充にいけないでしょ！！」

なんか島田さんがすごい良いこと言ってる気がする。

すごい。島田さんの言葉に涙（と激痛）が止まらないよ（注：明久は痛みに泣いているだけである）。

「島田さん。僕は君の男らしさに感動したよ。僕が間違ってた。鬼の補習なんか恐れずにこの戦争に勝利することだけを考えて動けばいいんだ!!」

「ウチは女よ」

「さあいこう！勝利を目指すんだ！」

島田さんの視線が怖い。が気にしないようにしよう。

と勝利を目指して意気込んでる所へ報告係がやってきた。

「報告します！先攻部隊、負傷者、戦死者ともに多数。撤退を開始しました！」

「よし！僕等の出番だ！」

「まって吉井」

島田さんに止められた。

「総員退避よ」

「さつきといってることが真逆だよ!？」

「私たちは十分頑張った。もうこれ以上は無理なのよ!！」

まだ何もやってないけどね。

しかもなんか戻っちゃいけない気がする。

「そうだね。僕等には荷が重すぎた。撤退しよう」

「了解」

二人して臆病風に吹かれた。

そこへ、隠密（暗殺）担当のムツツリーニがやってきた。

「・・・・・・・・・・・・・・・・明久」

「どったの？ムツツリーニ」

「・・・・・・・・・・・・・・・・雄二が、逃げずに戦ったら
これをやると」

「これは!!!！」

ひ、秀吉の着替え写真!!

「・・・・・・・・・・・・・・・・逃げたらこれを明久の家に

100枚送りつけるとも」

「こ、これは!!!！」

て、鉄人の入浴写真!!?

どうやって撮ったんだ!?!この写真!!

こんなの送りつけられたらたまったもんじゃない!

「全員突撃————!!!!！」

「え!?!撤退は!?!」

島田さんが驚く。

「みんな攻めるぞー！！出ないと、鉄人の入浴写真が家に送りつけられてしまうー！！」

「なんだって……!?!?!?」

「総員突撃いいいいいいいい！！！！！！」

[illegible]

僕等の脳破壊を防ぐためにも、この戦争に勝利しなければ――！
とここで前方から撤退してくる美少女^{ひでよし}を発見。

「明久！今おぬし、美少女と書いて秀吉と呼んだだろう！」

「そんなことより、ここは僕等に任せて早く回復試験を受けてきて！」

「うむ、かたじけない！」

秀吉が教室に急いでいく。

あとに続く選考部隊の人数が少なくなっている。

「吉井！試験召喚戦争のルールは覚えてる！？立会いの先生がいないと召喚獣を呼び出せないんだからね！」

「わかつてる!!」

試験召喚戦争には細かいルールや規約がいっぱいある。

1、原則としてクラス対抗戦である。各科目担当教師の立会いにより試験召喚システムが起動し、召喚が可能となる。なお、総合科目勝負は学年主任の立会いの下でのみ可能。

2、召喚獣は各人一体のみ所有。この召喚獣は該当科目において最も近い時期に受けた点数に比例した力を持つ。総合科目においては各科目最新の点数の和がこれに当たる。

3、召喚獣が消耗するとその割合に応じて点数も減点され、戦死に至ると0点となりその戦争を行っている間は補習室において補習を受講する義務を負う。

4、召喚獣は止めを刺されて戦死しない限りはテストを受けなおして点数を補充することで何度でも回復可能である。

5、相手が召喚獣を呼び出したにもかかわらず、召喚を行わなかった場合は戦闘放棄と見なし、戦死者同様に戦争終了まで補習を受ける。

6、召喚可能範囲は担当教師の半径10メートル程度（個人差アリ）

7、戦闘は召喚獣同士で行うこと。召喚者自身の戦闘参加は反則行為として処罰の対象となる。

8、戦争の勝敗はクラス代表の敗北を持つてのみ決定される。この勝敗に対し、教師が認めた勝負である限り、経緯や手段は不問とする。あくまでもテストを用いた『戦争』であるという点を常に意識すること。

要約するとこんな感じ。

ちよくちよく改定されたりはするけど、この認識でいいはずだ。よく覚えておかないと、『テストを用いていれば、召喚獣なしでも

勝負が出来る』なんてことには気づかない。

「吉井！見て！」

島田さんの指差すほうを見る。

「五十嵐先生に布施先生！？Dクラスのやつ等、化学で勝負を挑んでくるつもりだな！？」

化学自身ないんだよな……………

「学年主任だと総合科目になって時間がかかるから立会人を増やして一気に来るつもりなのね！」

「島田さん、化学どれくらい！？」

「60点台が普通よ」

さすがFクラス。ひどいなあ。僕が言えることでもないんだけど。

「ならあそこは避けて学年主任の高橋先生のところに行くのがいいな」

「了解！」

で、僕等はこそそと隅へ移動する。

……………あまりほめられた光景じゃないような……………

「美波お姉さま！見つけましたわ！」

「げ、美春！！」

「しまった！布施先生が来る！」

ここで二人で戦ってたら点数を消費してしまう！

仕方ない！

「島田さんここは君に任せて僕は先に行く！」

「え！？普通逆でしょ！？」

「そんな台詞、僕は知らない！」

「えええ！？」

島田さんが快く（？）引き受けてくれた！
先を急ぐぞ！

「吉井！あとで殺してやる！」

なんか物騒なこと言ってる！

「仕方ないわね！勝負よ美春！」

「お姉さま！美春の愛の一撃、受け止めてください！！」

Dクラスの清水さんと、島田さんの戦闘が始まる。

「「^{サモン}試獣召喚！！」」

第肆話

バカテスト 国語

第二問

問 以下の意味を持つことわざを答えなさい。

- 『(1)得意なことでも失敗してしまうこと』
『(2)悪いことがあった上に更に悪いことが起きる喩え』

姫路瑞希の答え

- 『(1) 弘法にも筆の誤り』
『(2) 泣きつ面に蜂』

教師のコメント

正解です。他にも(1)なら『河童の川流れ』や『猿も木から落ちる』、(2)なら『踏んだり蹴ったり』や『弱り目に祟り目』などがありますね。

土屋康太の答え

- 『(1) 弘法の川流れ』

教師のコメント

シュールな光景ですね。

吉井明久の答え

『(2)泣きつ面蹴ったり』

教師のコメント

君は鬼ですか。

明久SIDE

「「サモン試獣召喚!!!」」

Dクラスの清水美春さんと島田さんが同時に叫んだ。
と同時に足元になんか魔方陣っぽいものが出てくる。
これが教師の立会の下、試験召喚システムが起動した合図で、魔方陣の真ん中には所属するクラスが書いてある。

ポン！

そして召喚獣が姿を現す。

軍服にサーベルのその召喚獣は、顔つきや髪型がそのままで、身体だけ小さくなった『デフォルメされた島田さん』のような感じ。
相手の召喚獣もデフォルメされた感じの奴で、あつちは普通の剣みただけだ。

「お姉さま！美春の愛の一撃、受け止めてください！」
「ウチは普通に男の子が好きなの！！」

すごい激戦の真っ只中で繰り広げる会話としてはあまりにも不適切な気がする。

「男なんて豚同等の家畜ですよ！？お姉さまはそんなものに近づいてはいけません！！」
「ほっというてよー！！」

不適切極まりなさすぎる。

Fクラス 島田美波 化学 53点

V S

Dクラス 清水美春 化学 94点

「島田さんサバ読んでたの！？60点届いてないじゃん！」

「数学以外じゃ無理ー！！」

さらば島田さん！鬼の補習に生き残れたらまた会おう！

島田さんを潔く見捨てる！これも戦争なんだ！

「さあお姉さま！一緒に保健室のベッドであんなことやこんなことを……………」

「え、ちょ、吉井！助けて！なんだか危険な匂いしかないの！！」

島田さん。ゴメン。僕じゃ……………

「オネエサマの邪魔をスルモノ……………キリ（KILL）マス……………」

そこに行く勇氣はない！

「ちょ、吉井！」

「さらば島田さん！」

「アンタ、ウチを見捨てる気！？」

「戦争に犠牲はつき物サ！」

「覚えてなさいよー！！」

とそこへ須川君がやってきて……………

「島田！助太刀するぞ！！」

Fクラス 須川亮 化学 76点

VS

Dクラス 清水美春 化学 41点

須川君の召喚獣が清水さんの召喚獣を破る。
いわゆる戦死という状態だ。

「え？あ、あれ？」

突然やってきた須川君にあつと言つ間にやられてしまった清水さん。
島田さんとの戦いで点数をかなり消費してたから、簡単に負けちゃ
ったんだね。

「0点になった戦死者は、補習ーーーー！！！！」

清水さんが補習室に連行される。

「お姉さま！美春は諦めませんからね！美春の愛は鬼の補習程度で
は止められませんから！」

むしろ止めておいて欲しい。

とっても危険な香りのする捨て台詞を残して清水さんが鉄人に連れて
行かれた。

「吉井」

「島田さん。お疲れ。化学の点数を補充してきなよ」

「吉井」

「さ、須川君。他にも助けを求めている人がいるだろうから行こう！」
「吉井」

「・・・・・・・・はい」

「・・・・・・・・ウチを見捨てたわね」

「・・・・・・・・記憶にございません」

戦争というだけはあるな！殺気が（島田さんから）ひしひしと僕に伝わってくる。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

すごく居心地の悪い沈黙が続く・・・・・・・・

「死ね！吉井！試獣召^{サモ}——」

「誰か！島田さんが錯乱したぞ！本部に連行してくれ！」

「落ちて着け島田！吉井は味方だ！」

すごい殺気に満ちた目で僕を見ないで島田さん！

「違うわ！コイツは敵！ウチの最大の敵なの！」

否定する要素がない・・・・・・・・

「須川君。ヨロ」

「了解」

「放しなさい須川！あいつだけは・・・・・・・・あいつだけは——
——！！！」

身の確保だけは出来たな。

「よし！秀吉たちの補給が終わるまでここは誰も通さないぞ！」

大声で指示を出す。

「前線を突破出来れば、補給中の奴ばかりだ！Fクラスなんかに負けるな！！」

向こうの隊長格からも大声で指示が飛ぶ。

ここからが正念場だ！

勇斗side

教室で回復試験の真っ最中。

にがてじゃないか得意ともいえない

「先生！回復試験を受けさせて欲しいのじゃ！」

「秀吉！」

ドアを開けて秀吉が入ってきた。

「科目は何にしますか？」

「化学でお願いしたい！」

「では準備がよければ始めてください」

「（秀吉。戦況はどんな感じだ？）」

「（あまり好ましくないのう。化学の布施先生と五十嵐先生が出てきて苦戦しておる。）」

「（化学か……）」

丁度今受けている試験も化学だ。

「そこまで！姫路さんと風間君は引き続き数学のテストを……」

「

「先生。オレ数学のテスト辞退します」

「「え？」」

秀吉と姫路さんが驚く

坂本にはいつてなかったけど数学だけ振り分け試験でやった教科なんだよな

姫路「でも、坂本君の指示では数学も受けたほうがいいって……」

「……」

オレ「その教科は点数あるから大丈夫だ」

秀吉「前に1教科だけうけておったとか言っておったな」

オレ「じゃあ本を届けるついで行ってくる」

明久SIDE

「クソ！もう持たないかも……！！」

『吉井隊長！横溝が戦死！布施先生側があと二人に！』

『五十嵐先生側があとオレだけだ！援軍頼む！』

『藤堂が戦死しそうだ！何とかしてくれ！』

劣勢は想像以上だ。

雄二たちにも応援を頼みたいけどそんなことしたら作戦に使う戦力がなくなる……

「布施先生側は防御に専念して！五十嵐先生側は総合科目担当と入れ替わって効率いい勝負をするように！藤堂君はかわいそうだけど見捨てよう！」

『了解！』

「Fクラスのやつ等、時間稼ぎ目的か！？」

「何を待つてるんだ！？」

「あっちは世界史の田中が来たぞ！」

「世界史の田中だと！？」

「長期戦目的か……！」

まずい。Dクラスの人たちが、こっちの作戦に気づいてる。

姫路さん！まだなの！？

『布施先生側に戦力を集中させる！五十嵐先生はオレが行く！』

この声は……

「風間君！よかった！間に合った！」

「数学のテストはやめてきたからな」

「え？やらなかったの？」

「点数はあるからな。たまたま受けてたテストが化学で、Fクラス

が化学で押されてるって聞いたからな。五十嵐先生側のD連中は任せろ！」

「分かった！頼むよ風間！」

「わかった！」

風間SIDE

「クッソー………」

「援軍はまだなのか！」

こっち側はあと二人か。
相当追い詰められてんな。

「援軍だ」

「おお！風間！すまないが頼む」

「任せておけ」

「Fクラス風間勇斗、この場にいるDクラス全員に化学で勝負を申し込む！」

「な、何！？」

「Dクラス全員に！？」

「Dをなめてるでしょ！？Fの癖にー！！」

「御託はいいからかかってこいよ。早く戦いたくてうずうずしてるだ」

「舐めないでよね。行くわよ皆！」

向こうのリーダー格の女子が先陣を切ってくる。

「『『『^{サモン}試獣召喚！！』』』」

「^{サモン}試獣召喚！！」

Fクラス 風間勇斗 化学 ???点

VS

Dクラス 岡本辰美 化学 112点

今井さやか 化学 100点

上坂由美 化学 120点

碓由香 化学 93点

俺の召喚獣は黒い外套を着ていた手には短剣

「Fクラス風情がDクラスをなめるんじゃないわよ」
そういつて俺の召喚獣に襲ってきただが

「オレをなめんな」

Fクラス 風間勇斗 化学 ?39点

VS

Dクラス 岡本辰美 化学 0点

今井さやか 化学 0点

上坂由美 化学 0点
碓由香 化学 0点

相手はなにが起こったかわからない

「俺の勝ちだな」

「戦死者は補習室に集合!!」

「げ、鉄人!」

「ほしゅういあだ~~~~~!!」

そうしてDクラスの奴が連行された

Fクラスの奴に

「お前らオレが攻めると坂本に伝えておけ」

第伍話

勇斗 side

Aクラスに向けて歩いていく

たまにしかけてくる奴もあるが点数が表示される前にやつつけて行
った

なんかDクラスが見えたから
手伝ってやるか

「えっと平賀という生徒以外の奴に現代国語勝負を申し込みむ！
！試獣召喚」
サモン

「……なんだ！？」

そう思ったみたいだが平賀以外の生徒7人が召喚した

Fクラス 風間勇斗 現代国語 400点

VS

Dクラス モブ A 現代国語 110点

98点

100点

120点

89点

119点

108点

「……400点オーバー!?」

「何でFクラスにいるの!？」

「無駄口叩いてる暇はない」

そういつて一気に召喚獣を倒した

そして鉄人が来てそいつらを連行していった

「平賀だったけお前もやるか今急いでいるから今回は見逃してもいいが1つだけ条件がある」

「条件つてなんだ」

「俺の点数を誰にも言うなそうDクラスの奴らに伝えとけ」

「それでいいなら」

「契約成立だな」

そういつて出て行った

明久side

さかのぼること40分ほど前。

先生たちがどんどん呼ばれて戦線が拡大されている。

このままだと総合点数で劣るFクラスに勝ち目がなくなってしまう。

「須川君！何とか先生たちの動きを止められない！？」
「任せろ！」

須川君がうまくやってくれることを祈るしかない。

「よし、みんな！ここは耐えるよ！」

ピンポンパーンポン

この放送はもしかして須川君か！？

<連絡いたします。 船越先生。 船越先生>

ナイスタイミングだよ！須川君！船越先生を動かせるなら、Dクラス
の戦力はこれ以上広がらない！

<吉井明久君が体育館裏で待ってます>

・・・・・・・・・・・・・・・・あれ？須川？

<生徒と教師の垣根を越えた、男と女の大事な話があるそうです>

「すつうつがああああわあああああ！！！！」

なんてことしてくれてんだ！あのバカ！相手はあの船越先生だよ！
？婚期を逃して単位を盾に生徒に交際を迫る第一級危険人物ぞ？

「許さんぞ！すがわあああああああ！！！！」

「吉井隊長！あんたあ男だよ！」

「クラスのためにそこまでしてくれるなんて・・・・・・・・」

「みんな！吉井隊長の犠牲、無駄にするな！！」

やめて！あおらないで！

これは須川の策略であって僕にはそんな趣味はないんだ！！

『おい・・・・・・・・聞いたか今の放送』

『Fクラスのやつ等、そこまでするなんて・・・・・・・・』

『そんな括弧とした決意のあるやつらに、勝てるのか・・・・・・・・』

「？」

やめて！だからあおらないで！
クソッ！須川！絶対許さないぞ！

「みんな！吉井隊長の戦死を無駄にするな——！」
「おお——！！！」

ああ！うちの士気にまでいい影響が！もうやめて——！助けて——！

「須川！絶対に許さんぞ——！！！」

Dクラスと接戦になったところでクラス代表の雄二が応援に来てくれた。

「雄二！きてくれたの！？」

「ああ。明久。あの放送、すごくよかったな」

コイツ、僕の不幸を喜んでやがる！！

「ねえ雄二。須川君、どこにいるか知らない？」

「さあ。そのうち会えるだろ」

よかった！会えるんだ！

「やれる。僕なら殺れる………！」

「殺るなつての」

須川君！早く逢いたいよ………

「ちなみに、あの放送は俺の指示だ」

『キシヤアアアアア！！キサマダアアアアア！！』

「あ、船越先生」

僕はバツと身を翻し、逃げる。

身の安全の確保が優先だ！

「さて、そろそろいくか」

「そうじゃな。下校する生徒も出始めたことじゃし。バカはほつと

いて良いのかのう？」

「かまわん」

構えよ。

「あー……それと明久。船越先生がいるってのは嘘だ」

うそ？ウソ？嘘？

そのあたりはもう誰の気配もなくなった。

「逃がすかあ！！雄二イイ！！」

勇斗side

Aクラスに到着した

中に入る

近くの生徒に木下秀吉の姉を呼んできてもらった

「なんなのあなた私に用があるって聞いたけど
見た目は秀吉の女の子姿だった」

「えつと本を持ってきたんですけど秀吉に聞いてませんか」

「昨日言っていたような気がするわ」
本を渡した

「ありがとう」

「べつにいいです読み終わった秀吉に渡してください」

「じゃあオレはここで」

「あ、待ってあなたの名前聞いてないわよ」

「風間勇斗だ」

そういつて出てきたこれからDクラスに向かった

明久side

『Dクラス塚本、討ち取ったぞ!!』

敵の隊長格を討ち取ったようだ。

おおくのFクラスの生徒が下校中の生徒に混じってDクラスを取り囲んでいる。

「雄二どこだ!!」

もう僕には戦況がこっちに傾いてるとかそんなことはどうでもいい。
とにかく雄二を探し出して殺す!

「首を洗って待ってる!雄二!」

「援護に来たぞ！もう大丈夫だ！」

げ！あれはDクラス代表の平賀くん！

「Dクラスの本体だ！ついに来たぞ！」

「本体の半分は坂本を討ち取れ！残りは包囲されてる奴を助けるんだ！」

『おおーーーーー！』

雄二がDクラスの人たちに包囲される。

くっそっ！コレじゃ雄二に近づいて暗殺することが出来ないじゃないか！

と走り回ってた僕の視界に平賀くんの姿が入る。

「チャンス！」

雄二を殺れないなら敵を殺るまでだ！

近くにいるのは現国の竹内先生。いまなら勝てないまでもダメージは与えられる！

「竹内先生！Fクラス吉井が———！」

「その勝負、Dクラス玉野美紀が受けます！試獣召喚^{サモン}！」

「な！？近衛部隊！？」

Fクラス生徒と思われる奴の動きには注意して立つてことか！平賀ちゃんと僕の間にはDクラスの女子が割って入った。

「残念だったな。船越先生の彼氏クン？」

「違う！断じて僕にそんな趣味はない！」

「照れるなよ。さあ皆で祝福してやろうじゃないか」

と平賀くんがぼくを挑発してくる。

「あと少してDクラスを落とせたのに!!」

「お前じゃ無理だ。観察処分者のお前じゃな」

確かにそのとおりだけど、改めて言われるとむかつく!

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「どうした。やらないのか?」

確かに僕じゃ無理だけど・・・・・・・・

「君の言うとおり、確かに僕じゃあ無理だよ。だから・・・・・・・・」

「だから?」

「だから姫路さん。よろしくね」

「は?」

『何を言ってるんだ?このバカは』見たいな顔をしている平賀くん。まあそうだろうね。あの人がFクラスにいるなんて普通思わないから。

「あ、あの・・・」

で、僕の後ろから姫路さんが顔を出す。

「え?姫路さん?Aクラスはこの廊下通らなかったと思うけど。」

「えっと私はAクラスじゃなくて・・・・・・・・」

まだ状況をつかめてない平賀くん。

風間君がやってきた

「えっと、Fクラス姫路瑞希が」

「それと風間勇人が」

「「Dクラス平賀くんに、現代国語勝負を申し込みます（む）！！
試験召喚」」
サモン

「え？ええ？？」

風間君も戦うんだ

とりあえず召喚獣を構えさせる平賀くん。
でも無駄だろうな。

Fクラス 姫路瑞希 現代国語 339点

風間勇斗 現代国語 332点

VS

Dクラス 平賀源二 現代国語 129点

「あ、あれ？」

平賀くんの召喚獣は二人の大剣と短剣で消し飛んでしまった。
竹内先生が戦争終結を告げる。

「戦争終結！勝者、Fクラス！」

新学期一回目の試験召喚戦争はFクラスの勝利で幕を閉じた。

第陸話

バカテスト 物理

第三問

問 以下の文章の（ ）に正しい言葉を入れなさい。

『光は波であつて（ ）である』

姫路瑞希の答え

『粒子』

教師のコメント

よく出来ました。

土屋康太の答え

『寄せては返すの』

教師のコメント

君の回答はいつも先生の度肝を抜きます。

吉井明久の答え

『勇者の武器』

教師のコメント

先生もRPGは好きです・・・

勇斗side

オレ「やったね姫ちゃん」

姫路「やりましたねユウ君」

姫路が自分で言った言葉で赤くなっていた

オレ「じゃあ戻ろうか姫路さん」

姫路「えっ、あはい戻りましょう風間君」

Fクラスに戻ると

Dクラスを下したとあって、Fクラスのはしゃぎぶりは凄まじいものだった。

もともとがはいだり騒いだりが好きな連中で、しかも二つ上のクラスを下したのだからもうボルテージはMAXを超えていた。

「卓袱台に腐った畳とはおさらばじゃー！ー！ー！ー！」

「坂本雄二さままだな！」

「それを言うなら姫路さんだろう！あの点数は凄まじかったぞ！」

「姫路さん愛してるううううっ!!」

坂本がDクラスの代表と交渉らしいことを始めていた。

秀吉に話しかける

オレ「お前の姉に本渡してきたぞ」

秀吉「いつ渡したのじゃ」

オレ「試験召喚戦争中」

秀吉「そうか姿が見えないから戦死したと思ってたのじゃ」

オレ「まあいちよう働いたからいいだろう」

秀吉「何人倒したのじゃ」

オレ「数えた限り15人ぐらいだ」

秀吉「勇斗よお主頑張ったのじゃな」

オレ「別に点数が良かったただだから」

秀吉「何点じゃったのじゃ」

オレ「誰にも言っなよ」

近くに聞いている奴がいなか確認してから

耳元で言う

「化学239点 数学436点 現代国語 400点だ」

秀吉「お主頭良かったのじゃな」

オレ「そっいわれると照れるけどお願いだから絶対言っなよ」

秀吉「約束は守るのじゃ」

坂本が話し終わったのか平賀から離れていった

「平賀お前約束覚えているよな」

「わかっているけどなんでだお前の点数ならいつでも問題ないはずだけど」

「B組に根本と言った奴がいるだろうあいつが卑怯な手を使つと噂できたからな」

「もしも姫路が何かがやられて力が出せないときに後はザコしかいないFクラスじゃ太刀打ちできないからな」

「ああその時のお前か」

「この作戦も言わないでくれよ」

「わかったじゃあがんばれよ」

明久side

「で、雄二。なんでDクラスの設備を交換しなかったのは何でだ」

「さつきも説明しただろ。次のBクラス戦へ向けての種まきだ」

こいつはほんとに物分りが悪い。

「全く明久。そんなバカだからお前は近所の小学生に『バカなお兄ちゃん』って呼ばれてるんじゃないのか？」

Dクラス戦が終わってから、真琴がだんだんリラックスしてきたように思う。

「え！？何でそれ知ってるの？」

「え！？マジだったのか！？」

が突っ込む。

「まあ、BAKAあきひなはほつといて、今日はご苦労だったな皆！」

「待て雄二！貴様、今BAKAと書いて明久と呼んだな！取り消せ！」

「明日は今日の戦争で消費した点数の補充だから、ゆっくり休んでくれ！以上、解散！」

『『あざしたあー』』』

勇斗side

今日はマンションの方がいいかな

買い物を済ませた後

部屋に入ろうとしたらエレベーターから見慣れたやつがでてきた

「あれなんで風間君がいるんだ」

「なんでってオレの家がここだからに決まっている」

「へえそうなんだ」

「オレの部屋に来るか勉強でも教えてやるそれとついでに夕飯でも

作ってやるよ」

「本当にいいの今日は塩と水が主食だったからよかったよ 風間君
ありがとう」

「風間君と呼ぶのやめる勇斗でいい」

「じゃあぼくのこととは明久でいいよ勇斗」

「じゃあまたあとでだ」

そういつて別れた

その後明久がやってきた

「つまんない部屋だが入れ」

そう引越したばかりであまり荷物が置いていない

置いている家具も白黒のものしかないからな

オレ「食べてから勉強するぞ」

明久「うんわかった」

食べ終わった

「おいしかったよ久しぶりにお腹いっぱいになった」

「食べ終わったな勉強でもやるぞ」

そういつて勉強を始めた

「明久その答え違うぞその前もほら見せてみる」

明久の回答を見ると全部間違っていた

「どうだった勇斗」

「全部はずれだもう少し考えろよ」

「だったら勇斗の回答見せてよ」

オレのテストは全問正解だった

「だからバカなんだよ明久は仕方ないーから教えてやるよ」

そういつて教える

「これぐらいでいいか」

そういつて切り上げる

「ありがとう明日のテストできそうだよ」

「風呂入って行けようどせお前ガスとか払ってなくてシャワーとか冷たいんだろ」

「そうしてわかったの」

「塩と水を御飯にする奴が払ってるわけないだろ」

「じゃあお言葉に甘えて」

そして明久はかえっていった

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3516y/>

バカとテストと転校生！

2011年11月23日15時53分発行